

上谷田 弘代
KAMITANIDA Hiroyo



わたしは眠らない

紙本着彩

わたしは眠らない

わたしは思う。

ラスコーやアルタミラの壁画を描いた彼らのことを。洞窟の深奥まで行き、当時の最先端の技術を駆使して描いた遠い人類の祖先のことを。そして、システーナ礼拝堂の天井画をたった一人で描いたミケランジェロのことを。彼らは、何故そこにそれらを創造したのか？

人類には、基本的に物を創り上げたいという強い欲求がある。それこそが人類と他の動物との大きな相違点ではないだろうか？

そして、もう一つの大きな相違点は、美しいと感じる感性があるかどうかだ。

猿やチンパンジーは、人間に似ていても人と同様の美しいと感じる感性を持ち合わせていない。人間には特別な美を感じる力がある。

美術の他にも美しいと感じるものがある。例えば、音楽。

曲はただの音の集まりだが、その集まり方、配置、リズムによって快にも、不快にもなる。そしてダンス。ダンスも動きの集まりだがその規則性、パターンの繰り返し、集団で動きを合わせることによってありふれた日常の動作でさえ洗練された美にかえることができる。

人は、どんな形やリズムに惹かれるのだろうか？

美しいという定義は人によって異なる。

しかし、人間が根源的に美しいと感じるものには、一定の秩序が存在していると思う。人は脳で美を感じる。

わたしの考えでは人間の脳の中にも小さな宇宙が存在する。

だから、宇宙のリズムと共通するものに脳は共振させられるのかもしれない。宇宙を構成している法則を快と感じ、美と認識するのではないか。

人類は太古から美の秩序とはなにかについて考えてきた。

しかし、それについて全てを正確に述べた文献は見つからない。そもそも文字や言葉というツールでは表せないものかもしれない。わたしはその法則が知りたい。

振り返って、人が美と感じるものは脳が宇宙のリズムに共振したものだとしたらそこから考えることもできる。音楽やダンスのように何かの集まり方が共振できるリズムと秩序で組み合わせられた時偶然に美は出来上がる。組み合わせは無限にある。しかしルールは意外とシンプルかもしれない。

わたしは、その偶然構成された美を切り取っていく。描くことはそこに内在している美の秩序を具体化することである。

わたしは、それを大地に建造物を建てるような気持ちで画面に刻みつけていく。

「物を創りたい、立ち上げたい」という人類がもつ根源的な欲求を満たすために。わたしは、果てしなくその作業を続ける。